

「農山村集落との交流型定住による故郷づくり」 —持続的に“関わり続けるという定住のカタチ”による21世紀のふるさとづくり—

平成19年度
現代的教育ニーズ
取組支援プログラム
に採択

文部科学省「平成19年度現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)」に、関西大学が申請した「農山村集落との交流型定住による故郷づくり—持続的に“関わり続けるという定住のカタチ”による21世紀のふるさとづくり—」が採択されました。

本取組の中心となる環境都市工学部は、本年4月に従来の工学部を改組して再編された理工系3学部の一つで、環境や都市設計など地球規模の「まちづくり」を専門に扱う学部です。

日本の社会が直面している過疎化問題は、21世紀のまちづくりの重要な課題です。今回のプログラムでは、兵庫県丹波市と連携し、空き家となっている家屋やまちなみの

改善改修をはじめ、学生にとっての“ふるさと”創生と“関わり続けるという定住のカタチ”をテーマに掲げています。

今後3年計画で、交流型定住による故郷づくりの提案を実践していくとともに、取組終了後のローカルコミュニティビジネスも視野に入れて展開していく予定です。

取組の概要を紹介し、その趣旨や目的、社会的な意味などについて、本プロジェクトを初期段階から推し進めてきた環境都市工学部建築学科の江川直樹教授(建築環境デザイン研究室)に聞きました。



環境都市工学部の学生が丹波市で地域活性化に取り組む

空き家リノベーション、現地交流ワークショップが始動

■取組の概要

関西大学の「農山村集落との交流型定住による故郷づくり」は、今年度の現代GPの中で「地域活性化への貢献(広域型)」のテーマに属しています。建築や都市づくりを学ぶ学生が主体的に、かつ具体的に地域活性化に取り組むところに、今までになかった大きな特徴があります。

過疎化した農山村集落の活性化は、現代日本の大きな課題です。一方、都市住民として育った現代の大学生には、将来子供たちや孫を連れて帰省する豊かな山河のふるさとがありません。本取組では、過疎化し空き家の多く存在する農山村集落において、その空き家リノベーションをきっかけにして、人的物的地域資源の再活性化を図り、継続的永続的に関わり続けることのできる拠点の創生ならびにローカルコミュニティビジネスの創出を図ります。学生・卒業生とその家族が常に住まい、訪れ、帰ることのできる環境を形成するという構想を基にしており、21世紀のふるさとづくりのプロジェクトです。

参加する学生にとっては、将来的にも継続してさまざまな側面から参加し続けることのできる教育実践の場となり、社会貢献の場ともなります。丹波市青垣町を舞台に、大学と自治体、専門家集団が協働するフィールド交流型教育プログラムです。

▶ フィールドとなる丹波市

プログラムを実践するフィールドとなるのは、兵庫県丹波市青垣町佐治の集落です。丹波市は、兵庫県の中東部、山々に囲まれ、日本海と瀬戸内海のちょうど中間あたりに位置する人口71,500人、世帯数23,500の市で、旧6町の合併により、2005年11月1日に誕生しました。自然環境や歴史的景観が数多く残る素晴らしい地域です。青垣町はその真ん中あたりに位置する、人口7,100人の町です。佐治の集落は、江戸時代は宿場町として、その後も明治中期には製糸業により賑わいを見せ、現在もその面影の残るきれいなまちなみですが、人口も減り、ひっそりとした町になっています。

▶ 取組の実施体制

環境都市工学部が学部全体で取り組み、現地にTAFS佐治(丹波青垣フィールドスタジオ・佐治スタジオ)を活動拠点として整備し、丹波市・青垣町との交流や地域活性化活動を行うとともに、学生の教育を支援します。

また、TAFS佐治との緊密な連携を図るため、関西大学千里山キャンパス内にもTAFS千里山(丹波青垣フィールドスタジオ・千里山スタジオ)を設け、双方向での研究・計画・教育支援体制をとります。

関連の講義科目のほか、演習科目でフィールドワークとしての現地調査、交流ワークショップを実施します。さらに、大学全体で実績のあるインターンシップの発展型として、単位認定できる「インターンシップ型プロジェクト科目」を整備し、長期滞在型、合宿型授業科目を設けます。

これらの取組を支援するために、学内に「関西大学TAS(丹波青垣スタジオ)支援センター」を、丹波市や地域の専門家、学会など学外との連携組織として「TAS連絡協議会」を設置します。

本プロジェクトの遂行には、丹波市と住民の方々からも大きな期待が寄せられており、2007年4月以降、すでに数回の現地交流ワークショップや交流ゼミを開催しています。なお、関西大学と丹波市は、“まちづくり”に関する包括的な協定を締結、すでに、2007年7月9日に調印式を行っています。



■取組の趣旨・目的

現地で体感し、関わり続けることで
定住効果が生まれ「ふるさと」になる



環境都市工学部建築学科 建築環境デザイン研究室
江川直樹 教授

▶ 現代 GP に採択されたテーマに取り組んだきっかけは？

建築環境デザイン研究室の研究活動の一環として、日本建築学会創立120周年記念近畿支部主催事業「美しくまちをつくる、むらをつくる」設計・計画提案競技に、当研究室の学生グループが応募し、丹波市長賞を受賞したことに始まります。2006年10月のことです。この計画案は、丹波市佐治地区を舞台に、定住と交流のふるさととなる魅力的なまちづくりを提案するもので、今後の丹波市のまちづくりのシナリオとして説得力のある提案と評価されました。

今年度の工学部再編で「まちづくり」を専門に扱う環境都市工学部が誕生したことにより、過疎化した農山村集落の活性化という大きな課題に学部を挙げて取り組むことができる体制が整ったことも、ちょうど良いタイミングになりました。

近年、関西大学の学生は海外集落实測調査に参加したり、地域再生に関する設計競技などに挑戦して入賞するなど、学外での積極的な活動で次々に成果をあげています。

大学の建築学科は全国にたくさんありますが、関大でなければできないことがあるだろう、うちの研究室にしかできないことがあるはずだと考えてきました。まず、関大は学生数が多い。私の研究室はドクターまで含めると40人ほどいます。その中には、2005年から毎年2度実施しているカンボジアのカンポンプロック村の調査に参加しているメンバーもいます。人の力を結集しないと、1.3キロメートルに及ぶ村の実測図など作れません。

丹波市の場合は市企画部企画課内に定住対策係を設置して、住む人を増やそうとしています。学生にとってはフィールドワークになり、過疎の農山村がにぎやかになり、人があふれるだけでも意味があるのですが、私たちは学生が持続的に“関わり続けるという定住のカタチ”が21世紀のふるさとづくりにつながることを提案したのです。

▶ 副題に掲げられている“関わり続けるという定住のカタチ”とは？

過疎の根本的な問題解決は一朝一夕にはいきません。学生や先生が出かけていって、簡単なアンケート調査などをして何か提案し、さっと去ってしまう。学生や先生の論文は書けるかもしれないが、現実に村や町は何も変わらない。学生の勉強になり、本当に世の中のためになることは、もう少し、時間をかけて現地とつきあうことだと思います。

過疎の社会には構造的な問題がいっぱいあります。その一方で、経済活動にのまれないで残っている美しい景色があります。数多くある空き家は放っておくと、維持する人がいないから壊れていくだけです。長期間にわたって住民とつきあい、本音を知り、地域のさまざまなことを体感するなかで、住民と一緒に議論し、何かを行うことが重要なのです。

定住が求められていても、実際は過疎の農山村に多くの人が定住することは難しい。そこで、大学という形態を利用して、「持続的に“関わり続けるという定住のカタチ”」を考えました。つまり、学生が毎年途切れることなく、継続的に地域と交流すれば、常に学生が居続けることになります。それを定住の第一階層ととらえると、実際に住み続ける定住、つまり第二階層の定住もこれらの中から生まれてきます。二つの定住のカタチが重なることで、農山村が期待する定住効果が生まれます。

学生自身が農山村と中長期的に交流を続けることができれば、彼らにとってはかけがえのない「ふるさと」を持つことになります。日本の美しい、大切な社会資源を考える教育目標も達成されます。

日本の山は自然林と人工林が混じっていて、それぞれの役割を担っています。人工林というのは木を育てて、それを切って使うという仕組みです。農業が育てた作物を食べるように、木造住宅は育てた木を使いますが、その仕組みが今の日本では崩れてきています。

実は、田舎の山は都会にとっても大切なのです。山が変われば川の水も変わります。山を管理する人がいなくなり、みんな都会に出てお金で利便性を買う生活をするとうなるか。田舎が壊れたら都会も壊れるのです。もうかなりその兆候が表れてきています。過疎化がどんどん進む田舎を、きちんと整備していかなければなりません。学生たちはそういうことにも気づき、いろいろなことを学んでくれると思います。

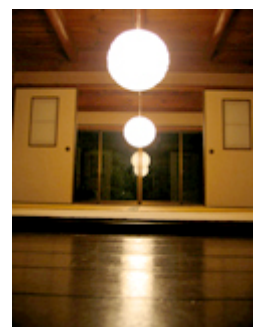
■取組の実施計画・方針

空き家をローカルコミュニティビジネス拠点に！

現地滞在インターンシップ型プロジェクト科目を実施

環境都市工学部建築学科 建築環境デザイン研究室

江川直樹 教授



▶ ふるさとづくりにつながる定住の核となる「空き家リノベーション」について。

交流・教育の拠点として整備される空き家リノベーションとは、使われなくなった伝統的な木造の空き家を借り受け、専門家と協働して改修工事を行い、用途や機能を変更して性能を向上させたり、価値を高めたりするプロジェクトです。

例えば、空き家を改造して、学生や卒業生と家族が安く泊まれるゲストハウスにし、地域でNPO的な仕事に就きたい人、田舎で経験を積みたい人に運営をしてもらえば、ローカルコミュニティビジネスの拠点となり、若者が定着する舞台となるでしょう。東南アジア

などに見られる学生や旅行者を対象にした安価な宿泊施設がヒントになりますが、さらに設計アトリエや、農山村地域を舞台にしたまちづくりコンサルタントの拠点なども考えています。放っておくと誰もメンテナンスしない建物が生き返ってくるのです。

長期間あるいは1週間程度でも滞在して、自然にも触れ、町にも触れ、現実の問題にも触れて、いろんなことを経験し、住民と交流する体験も積みながら、本当に地域の再生にじっくり取り組んでいくことが必要です。そうすれば、ここで暮らすのも悪くないと思う人も出てくるはず。地域が元気になってくると、町を出ていった若者が戻ってくることもあるでしょう。

都会やニュータウンで育っている学生が、将来結婚して都会で働いていたとしても、子どもを連れていくふるさとになります。先に述べたように、関わり続けるという意味で、関大生はふるさとを持てるのです。

今後の実施計画について。

▶ まず、今年は二つのメニューの公開講座を実施します。一つは環境都市工学部の学生に、過疎の農山村集落が抱えている共通の問題について、丹波市を具体的な場所としてレクチャーを受ける「丹波市を知る公開講座」を学内で定期的に開きます。もう一つは、地域再生にはどんな事例があり、世界ではどんなことが行われているか、「地域再生を学ぶ公開講座」を丹波市と関大の両方で開きます。どちらの場合も、丹波市の人も関大生も聴きに来れるように、バスを用意する予定です。

また、現地スタジオを作って、建築を学んだ人を常駐させ、そこをオープンにして学生が気楽に行けるようにします。交流ワークショップや交流ゼミを開くほか、現地滞在インターンシップ型プロジェクト科目を実施します。行政や森林組合、企業、住民組織などにも協力してもらいながら、空き家をリノベーションするプログラムやワークキャンプ的な現地体験を、インターンシップ型の授業として単位認定していきたいと思います。

最初は建築学科が主体になって空き家リノベーションなどを行っていきますが、これから山の問題や水の問題、社会システムの問題、ゴミの問題、交通の問題、その他さまざまな問題が出てくるはず。それらを学生が勉強して、来年以降具体的なプログラムに乗せていくという計画です。

大学の中にもスタジオを作り、丹波市は関大のフィールドキャンパス、遠隔キャンパスという感じになればいいですね。現地のスタジオは関大全体で利用するのがよいと思いますが、基盤をつくるころまでは環境都市工学部で行います。

学生への指導面で重視することは？

▶ 学生が主体的に考えて実行することが重要です。農山村地域の再生は、現代の日本が抱えている大きな問題です。すぐに役に立たなくても、時間がたてば本当に役に立つようなことを経験しておくこと、それを楽しみながらやるのが大事です。空き家を学生に掃除させると、関大生はこんなに働くのかと言われる。それはやっていることが楽しいからです。

彼らはカーテンを和紙のブラインドに替えたり、カッコいい照明器具を付けたりするだけでなく、徹夜もいとわず、その日に撮った写真をどんどん使って翌日のワークショップで発表する資料を作っています。障子やふすまを取り払って空気が通るようにすれば、この家はこんな構造を持っていたんだ、私たちの住んでいる町では昔はこういうことができたんだと、住民の方にも感じていただけます。それが空き家を生き返らせるのです。

私は学生に「考えるより先に感じろ」と言っています。そして「結論を急いで出さな」と。答えはすぐに出さなくてもよいのです。自ら行動して、自ら感じて、いろいろ考えて仮説は出してもいいが、結論は急がなくてもよい。大事な問題の答えは、関わり続けて、一生かかって出てくるものです。